



草は、種をまかないのに、どうして生えるの

種がないと、草は生えてこない

草の種は、とても小さくて軽く、目に見えにくいものです。そのため気づかないのですが、種ができる時期には、風にふかれて、そこら中に、種が飛んでいます。目につくものとしては、タンポポやハルジオンやノアザミなどのような、キクの仲間に入るもので、綿毛のついた種が、風にのって飛んできます。鳥やイヌなどの毛にくっついて、運ばれるものもあります。カタバミやスミレのように種をはじき飛ばすもの、アリなどが種を運ぶものなど、さまざまです。でも、種がなければ、何も生えてはきません。

また、地上の草が枯れたり、むしりとられてなくなっても、根が、土の下の深い所に残っていて芽を出すもの、根が横に広がってふえるものなどもあります。

運のよい、じょうぶな草だけが生えてくる

すぐ生えてくる雑草は、人間が改良してきた園芸用の草花とちがって、とてもじょうぶです。人間によくふまれる所には、ふまれるのに強いオオバコなどが残ってふえます。水が少ない所には、乾燥に強い草が生き残っていきます。日があまりあたらない、水はけもよくないような所には、そんな所でも生きていける草が、ちゃんと生えてきます。

植物の種は、水と空気と、適当な温度があれば、芽を出します。草の種は、芽を出した後、ぎりぎりの生活ができる所ならば、生きていけるのです。

日本は、雨が多く、気温も、一部の場所以外は、とくに高温や低温にはなりません。ですから、草が生えやすいのです。砂ばくのような所や、南極などでは、草もあまり生えてきません。（監修・矢野 亮）

